

DBS（乾燥ろ過血液検体）を用いた HIV ウイルス量検査方法論を検討
(2019年7月30日)

今回プロジェクトでは、北部地域の多くの地方病院との協力を予定していますが、それぞれの病院における設備・能力・役割は様々。メインカウンターパートである国立熱帯病病院（NHTD）では多くの検査が可能ですが、地方病院によっては自らでは HIV ウイルス量検査ができないところも多くあります。そういった病院からは、DBS（Dried Blood Sample）ペーパーと呼ばれる乾燥ろ紙に血液を垂らして乾燥させ、その DBS サンプルを NHTD に運送しウイルス量検査を行うという手順でのモニタリングを行おうと、今回プロジェクトでは考えています。更にその DBS による検査で高いウイルス量値を示した場合には、血液（血漿）を運んで薬剤耐性検査を行い、より効果的な治療、薬の処方につなげていきたいというのが狙いです。



バクマイ病院検査技師と意見交換



ラボでの作業は細心の注意が必要になります

DBS を使用したウイルス量検査は、遠隔地からの検体輸送を簡便にするため、世界でも多く試みられていますが、ベトナムでは幾つかの研究プロジェクト等以外では使われていません。ハノイ市内の病院であれば、直接血漿を中央病院に運ぶことも比較的容易ですが、より遠隔地、或いは山岳地など交通インフラの悪い病院からの運送には DBS が便利です。ただ、そのサンプル採取法、分析方法についてはプロジェクトとしてもきちんと確認し、NHTD スタッフにもトレーニングを行う必要があります。

今回はベトナムにおいて DBS でのウイルス量検査に経験のある、バクマイ病院のラボにご協力を頂き、日本の専門家も交えて、その検査方法手順を確認し、ベトナムのやり方に違いがあるか、現地で購入できる試薬が日本とどう違うかなどについて意見交換しました。やはり同じ検査と言っても、国が変わると、色々違うもの。特に使える試薬や機材が変わると色々な差が出るもので、やはり「百聞は一見に如かず」とはこのこと。実際の運用に向けては、ベトナムでの現状も踏まえた幾つかの修正が必要になってきそうです。

今後は9月に実施予定の NHTD ラボ職員向けのトレーニングに向けて、地方病院の協力も得ながら、サンプル採取方法、各種検査実施方法をより精緻にしていきます。